

持続可能なまちづくりを目指す防災学習

愛媛大学教育学部

はじめに

愛媛大学教育学部社会科教育講座井上昌善研究室では本年度西予市野村町にて2度持続可能なまちづくりに関連した防災学習を行いました。1つ目が災害伝承展示室を活用した防災プログラム、2つ目が西予市立野村小学校の総合的な学習の時間に野村町の復興まちづくりに着目した防災学習を実施しました。今回はその2つのプログラムについてご紹介します。



①災害伝承展示室を活用した防災学習

災害伝承展示室について

ZONE1	ZONE2	ZONE3	ZONE4
導入展示 多様な地形があることによる恩恵とリスクや西日本豪雨時の概要や被害状況が示されている ⇒災害が起きる前のまちな姿を知ることができる	事実を知る 災害が起きた当時の様子、被害状況や復旧について写真や新聞記事、映像資料で示されている ⇒災害の状況をありのままに知ることができる	復興への歩み 市民、民間団体、行政による復興の取組や、県内外からのボランティアによって復興まちづくりが行われたことが示されている ⇒復興の在り方が可視化されている	被災から学ぶ 災害当時の避難、備え、助け合いなど災害当時の証言が行政のフィルターを過ぎずに伝えられている ⇒教訓から防災・減災について考え次につなげることができる

災害伝承展示室は平成30年7月豪雨被災後、西予市復興まちづくり計画で取り組むべき施策として掲げられた「災害の記録と記憶の継承」を推進するために整備された。施設は「事実を知り、学び合い、備えの先にいのちを守る」というテーマのもと、4つのゾーンに分けられており、災害前の町の姿、災害時の状況、復興へのあゆみ、そして未来への備えについて写真や映像などの資料を用いて説明されている。そのため防災・減災の視点に立って災害と向き合い、また災害を風化させることなく後世に伝えていくことができる施設である。

学習プログラムの目的

災害伝承展示室は復興まちづくりの取組の1つとして災害の記録と記憶の継承を目的につくられた。施設は4つのゾーンに分けられており災害が発生した要因や災害発生当時の状況、復興へのあゆみ、被災からの学びについて展示されている。そのため施設の見学を通して、災害の発生から復興までの一連の過程を学ぶことができる施設となっている。その一方で災害が発生した要因や復興まちづくりの取組などについては展示がされているものがすべてではなく、展示されていないものも当然存在する。復興まちづくりは行政と市民が一体となって行っていく必要があり、施設の展示物についても行政と市民の両者が考えていくことが求められると考える。そこで施設を活用して災害について多角的に学ぶとともに、施設に展示されていない復興の取組についても目を向け、新たな気づきや学びを他者と共有することを目指す学習プログラムを提案する。

学習プログラムの目標

- 過去に発生した地域の自然災害に着目し、災害が起こる原因を知るとともにどのような復興まちづくりが行われているのかを捉えさせることを通して、自分の住む地域で発生する恐れのある災害や、その災害から身を守るための方法を知ることができる。
- 災害の原因や復興まちづくりの取組を学んだ上で、災害や復興の取組について展示すべき内容を発見し、他者に情報発信することができる。

→まとめの活動の「学習を通じてもっと調べたいと思ったこと」に関する記述より判断

学習プログラムの流れ

段階	学習活動	発問	学習内容
復興まちづくりの確認	災害から守りたいものは何か考える。 野村ではどのような復興まちづくりが行われてきたか予想する。 災害伝承展示室を見学する。	○私たちが災害から守りたいものは何か。 ○災害から守りたいものを守るためにどのような復興まちづくりの取組が行われてきたのだろうか。 ①「どういった人がどのような復興まちづくりに取り組んできたのか」 ②「何のために取組が行われてきたのか」	近年いつ災害が起こってもおかしくない時代だということを捉えさせたい。災害から守りたいものを考えさせる。 野村での復興まちづくりの取組を予想し、地域の防災や減災に目を向けさせる。 2つの視点で展示室を見学し、災害から守りたいものを守るためには多くの人が関わり、様々な取組がされてきたことを理解する。
まとめ	展示室見学から分かる野村での復興まちづくりの取組について意見交換をする。	○展示室の見学を通して分かったこと、分らなかったこと、もっと知りたいと思ったことは何か。	意見を共有することで自分が着目しなかった復興まちづくりに必要な取組に気付かせる。

野村での復興まちづくりの取組についてまとめることを通して、自分の住む地域で発生する恐れのある災害や、その災害から身を守るための方法を知ることができる。

①「野村で大きな被害が出た要因」
②「野村は災害からどのように復興してきたのか」

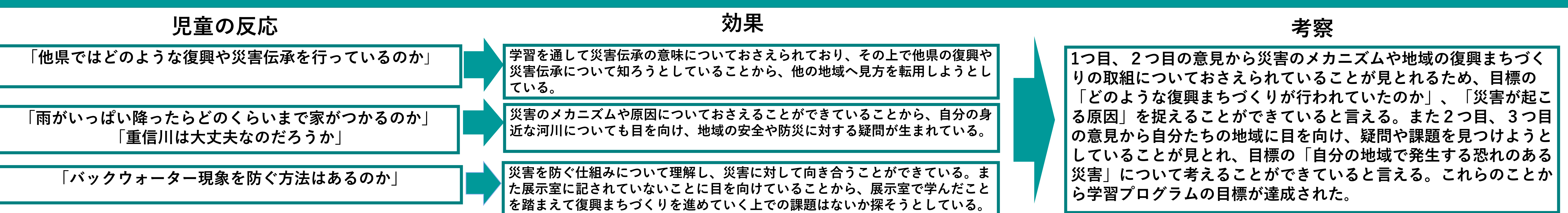
展示室にはない要因や取組を説明することによって、復興まちづくりの新たな視点を見つける。

これまでの学習を通じてもっと調べたいと思ったことについて、スターにまとめることを通して、次に来館する人に展覧に情報発信する。

○野村で災害が起きた原因と復興まちづくりの取組、これまでの活動を踏まえてさらに調べたいことをポスターにまとめることを通して、次に来館する人に展覧に情報発信するためのポスターを作成し、展示室を見学する際の視点や考えたことを伝える。しよう。

※守りたいものを守るために防災学習を行うにあたって、初めから公的なもの(復興まちづくり)について考えることは子どもにとって難しいのではないかと考えた。そこでまず子どもたちの身の回りにある守りたいものについて考え、その上で復興まちづくりの取組に着目させることによって、災害の原因や災害から身を守る方法などについて考えるなど学習に広がりが見られると期待している。

学習プログラムの成果



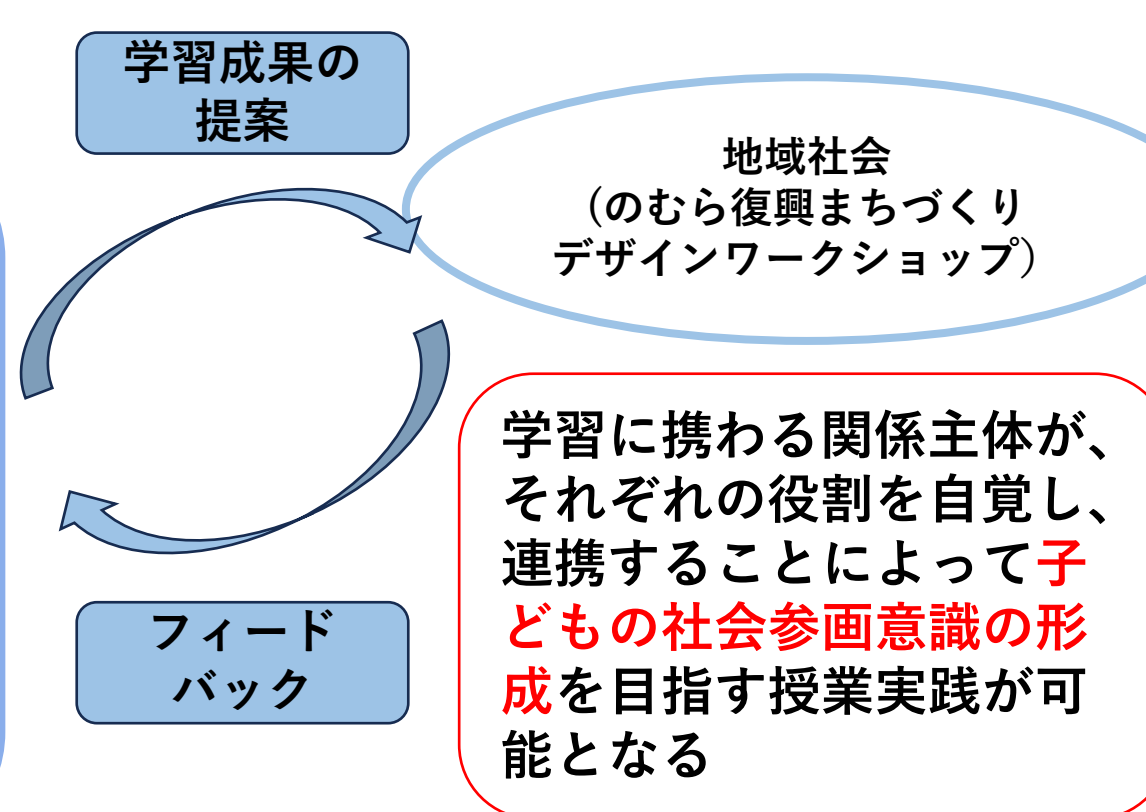
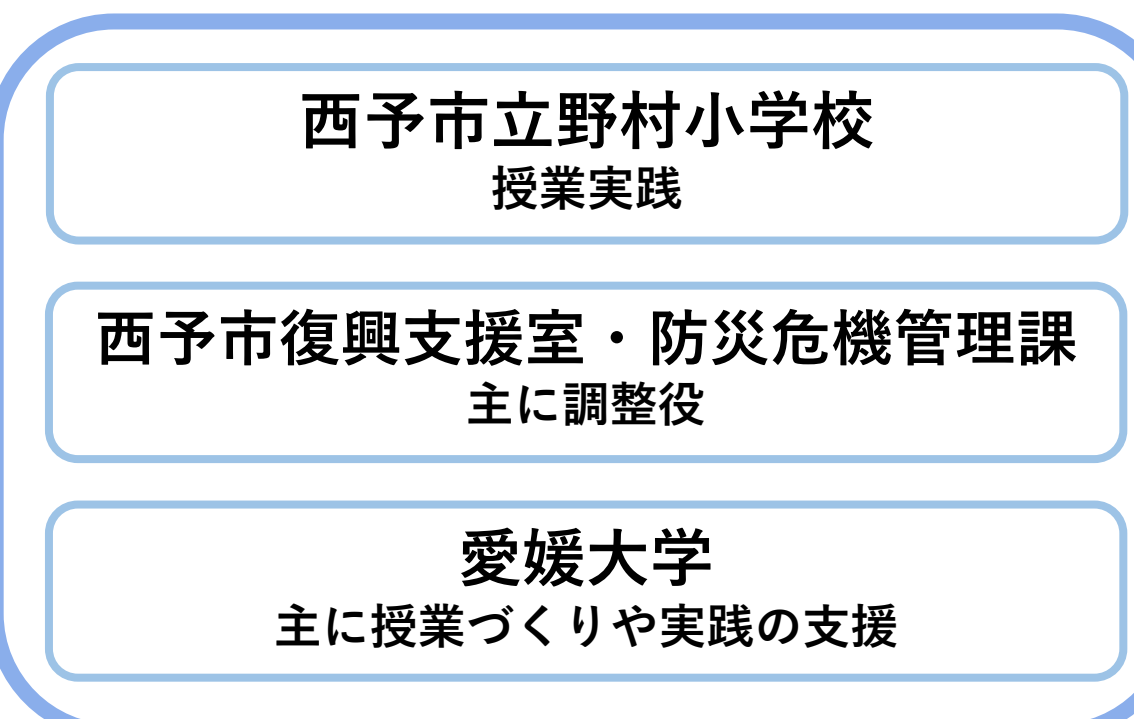
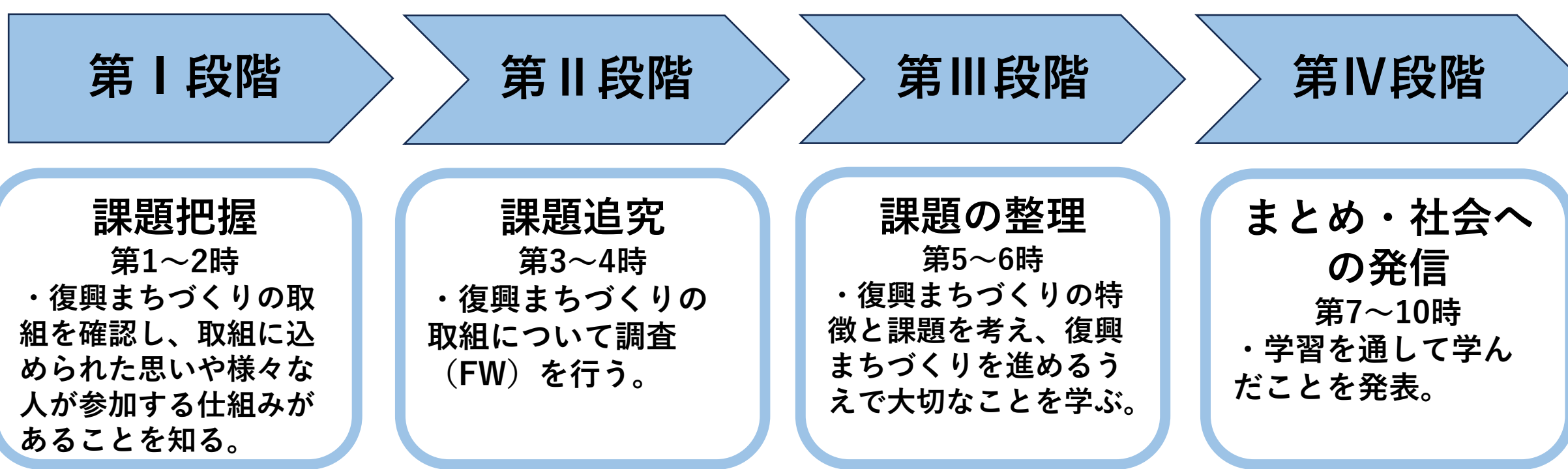
②復興まちづくりに着目した防災学習

単元の概要

のむら復興まちづくりデザインワークショップとは

西予市立野村小学校第6学年総合的な学習の時間単元「復興まちづくりの取組を発信しよう！」

単元開発に携わった関係機関と連携体制



西予市復興まちづくり計画に基づいて、野村地区における安心・安全のまちづくりと住まいの再建、商店街を起点とした地域活性化など、発展につながる復興まちづくりの在り方について市民と愛媛大学、東京大学、行政などが一堂に集まり、アイデアを出し合い、野村地区の将来像を描いている。令和元年5月より継続して開催しており、これまで23回開催されている。

単元の展開



今後に向けて

災害伝承展示室を活用した防災学習を開発し実践することは、地域で発生した豪雨災害の要因や復興の歩みについて詳しく学び、理解することができるだけでなく、復興まちづくりの課題に向き合い、地域の未来を考えることにも繋がると考える。また復興まちづくりに着目した防災学習を開発し実践することは、まず復興まちづくりの取組や課題を発見することにつながる。そしてそれらを踏まえ復興まちづくりの推進につながる提案を地域社会に向けて発信する活動を行うことによって子どもたちの社会参画意識を形成し、持続可能なまちづくりに繋がると考える。今後は2つのプログラムの改善を行うとともに、両実践の関連性について考察を行っていきたい。